

【第三回目】「一念三千について(その1)」

【前回のおさらい】

前は、「南無妙法蓮華經」と唱えるとなぜ成仏できるのかをテーマにお話をすすめました。仏さまの「生きとし生けるもの全てを救いたい」という願い(慈悲の**本願**)にこたえ、私たち衆生が「お題目」の七字を一心にお唱えする(絶対の信仰による帰依**誓願**)。その結果として私たちはお釈迦さまを私たちの心の中にお迎えし一体となり成仏できる(受持成仏)…と学びましたね。

仏→慈悲の**本願**により「妙法蓮華經(五字)」を譲与→衆生

(果)←絶対信による帰依**誓願**「南無妙法蓮華經(七字)」←(因)

これまでの説明の中で、中国の天台大師は「理の一念三千」を、日蓮聖人は「事の一念三千」を説かれたと、説明したのを皆さんおぼえていますか？

今回から、「一念三千とは何か」につき数回にわたりお話して参りたいと思います。

「成仏とはなにか」という仏さまの教えの根幹中の根幹に一気に踏み込んでまいりますので、どうぞ最後までお付き合いをよろしくお願いいたします。

【一念三千の意義】

① 一念三千は『法華經』のみに具わった最高の宝

これまで、『法華經』こそ成仏の為の教えである(特に末法の世ではお題目)。他の教えでは成仏できないとお話しして参りました。『法華經』だけに説かれている教えに二乗作仏、久遠実成、開会、女人成仏などがありますが、なかでも最も大事な教えは「一念三千」です。

一念三千の教えは天台大師がその著述『摩訶止観』の中で正しい瞑想修行の方法として「自己の心中にそなわる仏界を觀、それと一体となること」を説き、更に弟子の湛然(たんねん 711-782)が『摩訶止観輔行伝弘決(まかしかんぶぎょうでんぐけつ)』で「一念三千こそ天台大師の『終窮・究竟の極説』と解説した教えです(岩波仏教辞典 P41~42 要旨)。

さらに時代が下って末法の世、日蓮聖人は一念三千の教えを「不思議で素晴らしく言葉に尽くせない類いまれなるもの(小乗大乘分別抄)」、「法華經だけがそなえた最高の宝(兄弟抄、觀心本尊抄ほか)」と称賛されています。

② 成仏は一念三千に限る

すべての仏さまは一念三千を悟ることにより時間的にも空間的にも限らない広大な生命と成ること(つまり成仏)ができたのです。このことを日蓮聖人は「一念三千こそ仏に成る道と見ゆれ(開目抄)」と、一念三千によらなければ成仏はあり得ないと説かれています。

③ 上の①と②から、『法華經』よらなければ成仏はあり得ないということになりますね。今回は天台大師の説かれた一念三千(理の一念三千)の内容についてお話しいたします。

(次号に続く)

日蓮宗専任布教師、身延山久遠寺大本願人 山本顥伸